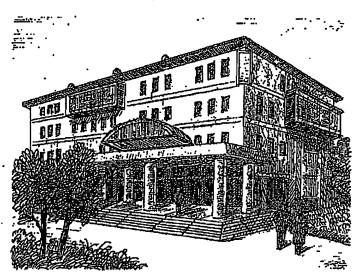
ATTACHMENT A

大会講演要旨集

■2003年度(平成15年度)大会[東京]■



日本大学湘南キャンパス図書館

大会與速記事		# # 151
座長一覧	ا جا	じこみ
一般講演要旨 ····································		
一般時便受冒		1
学会賞等受賞者識演要旨		291
•		
シンポジウム要旨	***************************************	331
新製品・新技術セミナー要旨	************************************	417
人名索引	***************************************	(1)
キーワード索引		·· (53)
	•	••
• • • • • • • •	• • • • •	
出展企業誌上情報		英士
MOCTE SCOOL IN THE	•	-5:56



社団法人日本農芸化学会

ì

2A20p04 IL-18以前化管抑制性下額的および経口トレランスの時等に必須 である

〇辻 丸子、ノバック ベルナデタ、ラチコーパ ルドミラ (生物) 研・生体的研)

抑制性で適応(Tree)は生体値常性を保つ上で重要な役割を担っており、Tree機能に異常が生じるとアレルギー・自己免疫疫患の要因となる。私たちは、食物や風内面間に唱される情化管免疫環境の特殊性に着目し、マウスに抗原を経口投与した際に情化管パイエル版でTreeが誘導されること、パイエル版由家ではクローンに禁止性サイトカイン、とりわけ11-48に対して高い房有性を持つことを報告してきた。中旬、Treeを任りトレランス関係においてII-18が19 vimでどのような役割を担うのか、II-18ノックアウド(EG)マウスを用いて原料を行った。高春全のβ・ラクトグロブリン(BIのを任口投与したCTBL/5マウスのパイエルを観応には抗原得異的Tree機能(Invitro所体を生物的、が影響されたが、II-1801マウスでは原理部が大援していた。また。BIGE(口投与により野生量マウスでは対原得異的免疫が各等がでしく低下していたが、II-1802マウスでは対原得異の免疫が各等がでしく低下していたが、II-1802マウスでは対原得異の免疫が各等などく低下していたが、II-1802マウスでは対象を持た。以上、自然免疫シケナルのひとつであるII-18が、情化管におけるTree機能とトレランスの関係に必須を知る担うことが明らかとなった。

2A20p06 対抗の低口数数数に加す」vo抗原制数で関係される対象的な否 ○連四 校子、日比 世間、八村 数志、上野川 磐一 (東大院設生 特・応生化、「森永郎森研)

(目的) 対域の毎日技事により抗原特異的免疫を存の使下(毎日免疫資金)が誘
等される。本研究では抗咳の毎日技事が全体内における抗原特異的内閣を指
を 及ばず影響を向べるため、あらかじめ抗原を発口投与したマウスに抗原特異的
の 知意を移入しては、116所便制度に対する影響を解析した。
(方法・結果) 名自然に対途だけが心を持口数をしたほぼパマウスにの思うベルし

2A20p06 抗原協力報酬 (いい) により担示されている抗原の表出系の確立 とこれを用いたは、elvoにおける抗原を示の解析 の市川 甘太郎、八村 乾油、佐崎 あゆ子、加地 女弘、伊勢 伊、 戸屋 程・上野川 修一 (東大統属生料・応生化、東大統員生料・ なシグナル (例系))

[目的] APCは抗原を「政内に提示する」とで免疫体等や免疫資格を誘導する。しかし、投与された対象をLavivoで抗原提示しているAPCを直接回床している配合は少ない。本研究では、ビオテン化したのAPC展いて抗原を提示しているAPCを放けない。本研究を成し、、原作関導条件で収多した。抗療を提示しているAPCの外の会員的とした。「方法」BLEM(マウスに皮下性針により3mcのピオチン化のAPC を支払、「いれてリンパは適因を取り出した。フローサイトメトリーを用いてそれぞれのAPC等が展示している抗原を、全形保護したストレプトアビジンにより検出した。【結果】BEDをマクロファージでは抗原由床の選択を得とんど確認できなのスた。それに対しているILEをの財状和島では24年が前頭由来の選択を用していた。このことからビオチン化のAPC用いることとが自然原発示の観念が可能であり、抗原皮下投与投のリンパかでは損失知をが気度を提示していることが示された。現他、抗原を提示している世状和助の解析を連めている。

2A2Op07 哺乳剤からのフラクトオリゴ管の軽口摂剤が研管はが体の分的 たらびに抗体分泌医子 (polyaeric immangiobalin secepter) 免収に与える影響

〇中村 宫学、野坂 昌子、静木 美沙、高梯 载、矢岛 高二、茂·吕 丙·(明治乳腺染料研、「日大會学昭病理学教室)

[目的] 昨年度、展乳的からのフラクトオリゴ酸の摂取はハイエル復知室の信性化を介して存マウズの居管抵抗中の1以抗体合置を増加させることを報告した。今日、居営への18以前分泌量を実施すると共に抗体分泌因子の路管内発現量を設計したので報告する。「方法」フラクトオリゴ湾(明治経界部)を35(大分室から大海にから第4次に、13日的で行マウスを展乳させ同様の研算を36日的母子マウスに自由抗政会せた。13日的で行マウスを展乳させ同様の研算を36日的会子マウスに自由抗政会せた。13日的で行マウスを展乳させ同様の研算を36日的会子で表現して投与した。森酔下、仟マウスの回路京場に居営ループを作型して30分後に居営内容効を回収し、その18以前令者を選定した。「技术/等契1703(分)即の145余分泌費力よび抗体分泌因子の発現量と対定といる。「技术/等契1703(分)即の145余分泌費力よび抗体分泌因子の発現量と対定といる。「対抗体含率の12分(対抗体含率の13分)を発展を関連し抗体令が固分のアラクトオリゴ活の投資は店営お譲中の14人抗体含量の増加と抗体分泌因子の見り、特殊分泌を促進することが示唆された。

2A20p08 拘束ストレス負荷内の811Idobzeterlua面体成分役与による項管 免疫系への影響 〇章保 博樹、細野 朝、木村 貞町、中村 負 (日大生資料・食料 工)

【目的】 間管免疫系では1m分泌が感染が関などに高層な役割を担っているが、ストレスによるその免疫の客への影響についてはほとんど男らかになっていない。 我々はマウスに拘束ストレスを負債し、プロバイオティクスとしての処身が現的されるBITIdobacterica periocalesalsica Toli (双) 箇件成分数今による過管免疫の客への影響について検討した。[方法・結果] 健性MLM(ペウス(75分)と認該日間拘束ストレスを負債した結果血中コルデコステロン健康性が担似を比べて有意に増加したが、国内容物中総1以呈、パイエルを認定1以建生的は拘束ストレス静が対限群と比べて有意に低下した。マウスに1週間町を投与し(4,532)合列料を自由扱動、連続5日間拘束ストレスを負荷したところ。血中コルデコステロン健康の上昇が抑制され、部内容物中総1以呈、パイエル伝統的の1以、1所・2度生ともストレス負荷的においても17%で成生が高速度で提供されたことかも、ストレス負荷時においても17%で成生が高速度で提供されたことかも、ストレス負荷時においても17%で成生が高速度で提供されたことかも、ストレス負荷時においても17%で成生が高速度で提供されたことかも、ストレス負荷時においても17%で成生が高速度で提供されたことかも、ストレス負荷時においても17%で成生が高速度で提供されたことかも、ストレス負荷時においても17%で成生が高速度で提供されたことかも、ストレス負荷時においても17%で成生が高速度で提供されたことがありませた。

2A2OpO9 仟マウスのインフルエンザ感染に及ぼすLactobacilius case! Shirota快速ロ校与の影響 O保井 久子、常島 賀子 (ヤクルト中研)

[目的] 乳効児はインフルエンザに罹患とやすく高齢者とともにハイリスクグ
ループに挙げられている。そこで、免疫政策作用をもつlactobacilius casel
幼irola株(LoS) を乳任マウスに経口技をすることにより、インフルエンザ配換
が経滅されるかを放射した。「方法と結果」運動の異なるBLE/に型マウスにイン
フルエンザウイルス(IPP、FLS)を下気道感染させると、仟(1: 2返回)マウスの
生存率は、成果マウスに比べ有常に低低を示した。そこで、全後3日目から6週間に
Lは生菌を3回/風、青ゾンデにて経口技与後、「FVを上気道感染させ、3日目の身 洗浄液中の「F型を製に対した」その結果、1c5数の料では、コント
ロールの呼に比べ有常に減少した。さらに、上気道感染3日にほど前後を対応を なタレーア発売率と生み率を測定したとよう。 Lc5数の配発1日目の前間成の内が合せと使存 切って対応率と生み率を測定したとなう。 Lc5数の配発1日目の前間成の内が合せと使存 リンパ組織の「L-12変生地は有常に対かしていた。以上の事から、Lc5は行マウス の気道の関係性免疫を増強し、インフルエンザが放発を経域することが示唆された。

2A20p10 インスリン依存性態限病の免疫を誘導する自己免疫を予を抑制する乳酸菌の快媒 の数本 淳、長谷川 筒子、木元 広安、水町 功子・民本 吸史 (野大・生化工、温味機構・音写研)

2A2Opli 抗アレルギー効果のある乳酸Mlactobacitius parausei [72] iQ 株の選抜 井上 小牧、函井 紋珠、西田 梨、〇旦原 大介(キリンビール・

井上 小夜、節井 敏雄、西田 曜、〇延原 大介(キリンピール・ 養盤研、「小岩井乳泉・商兒七)

【目的】 抗アレルギー効果の強い乳原菌を運住することを目的として、「bl/fbl パランスアッセイを行い、解析を行った。

【方法と結果】BALB/sマウスをdayO、daySと1関卵白アルブミン(OPA)で抗重感 作し、詳細胞を開製した。様々な乳腔関係及びヨーグルト分離質を最加したIPA 含布地보で、早度した詳細胞を1日間均差した。そのほ消費上前のTBIウイトカイ ンとしてIL-12を、TB2サイトカインとしてIL-1を悪虚した。その対象、最も強い IL-12度生態を示し、最も強いIL-14契約数を有する株としてLatioNatillias paresasel X73110株を発見した。スクリーニング純果は、多様性に含んだ結果と なり、乳酸図のTb1/Tb2パランスに与える効果は個レベルではなく、株レベルで 会く違うことが分かった。また、収度マクロファージについて乳酸のIL-12度 がマクロファージをターゲット観測にしていることが示唆された。さらにP-23 シグナルの検討を行ったところ。EF3118株によって活性化することが示唆された。

(Translation)

Published March 5, 2003

ABSTRACTS FOR ANNUAL MEETING ANNUAL MEETING 2003, TOKYO

(Table of contents omitted)

JAPAN SOCIETY FOR BIOSCIENCE, BIOTECHNOLOGY, AND AGROCHEMISTRY

2A20p11 "Selection of Lactic acid bacteria having anti-allergic effect,
Lactobacillus paracasei KW3110"
Sayo INOUE, Toshio FUJII, Satoshi NISHIDA¹, Dalsuke FUJIWARA
(Central Laboratories for Key Technology, Kirin Brewery Co., Ltd.;

¹Technical Development Center, Kolwai Dalry Products Co., Ltd.)

[Purpose] For the purpose of selecting lactic acid bacteria having strong antiallergic effect, Th1/Th2 balance assay was performed and the results were analyzed.

[Methods and Results] BALB/c mice were sensitized with ovalbumin (OVA) as an antigen at day 0 and day 6 to prepare splenocytes. The isolated splenocytes were cultured for seven days in various OVA-containing media to which various lactic acid bacterial strains and bacteria isolated from yogurt had been added. The culture supernatants were measured for IL-12 as Th1 cytokine and IL-4 as Th2 cytokine. As a result, Lactobacillus paracasel KW3110 strain was identified as having the highest IL-12 productivity and the highest IL-4 repressing activities. The screening gave diverse results, from which it was understood that the effect of lactic acid bacteria on the Th1/Th2 balance varies greatly from strain to strain, rather than from species to species. Further, activity of lactic acid bacteria to induce IL-12 production by peritoneal macrophages was studied to be revealed that the results were not different from those with the splenocytes, which suggests that the macrophages are the target cells of lactic acid bacteria. Results of NF-kB signal measurement suggested that the signal was activated by KW3110 strain.